

HAY-2444 Hayashi, A., Nishinuma, Y. & Yabe, H. (2005): "Variation in Japanese gender-related expressions: Utterance final particles and their phonetic characteristics in young speakers", *11th Int. Conf. EAJIS* (European Association for Japanese Studies), 43, (31/08-03/09/2005, Vienna, Austria).

ジェンダーによる日本語表現のヴァリエーション・若年層の用いる発話末の表現形式と音声的特徴・

林明子（中央大学 nhakiko2@tamacc.chuo-u.ac.jp）

西沼行博（フランス国立科学研究センター）、谷部弘子（東京学芸大学）

## 1 研究の目的

普通体会話では、一般に、性別による文末の表現形式の違いが、日本語の特徴として取り上げられる。近年、若年層を中心とする「ことばの中性化」が言われ、「行くんだ／行くの」、「残念だね／残念ね」のような普通体文末表現の差異を絶対的な男女差として取り上げることはなくなった。しかし、現実の話しことばでは、同一の表現形式をとっていても音声的な差異が観察される場合がある。

本研究では、特定の場面における文末の表現形式とその音声的特徴に焦点をあてて、若年層の日本語運用の一断面を明らかにすることを目的とし、次の2点について検討する。

- （１）男女両用の表現形式にもさまざまなバリエーションが存在するが、形式の選択に男女差はみられるか
- （２）同一の表現形式を使用する場合、音声的特徴（特にプロソディ）に違いはみられるか。

具体的には、男女差の研究で取り上げられることの多い「んだ」が用いられやすい場面、すなわち「理由説明」「事情説明」の2つを設定した。それぞれの場面ごとに、「んだ」がどの程度使用されているかを見ると同時に、「んだ」に変わる表現の使用についても観察した。加えて、「んだ」等の男女双方に現れる表現形式を用いた会話を録音し、音声分析を行った。

## 2 先行研究

### 2.1. 文末言語形式の規範と実態

80年代から90年代にかけて、自然談話を資料とした記述研究が盛んになり、いわゆる「女ことば／男ことば」の規範を逸脱した実態が明らかにされた（小林 1993、現代日本語研究会 1997・2001 ほか）。その中で、文末の言語形式に焦点をあてて分析をおこなった尾崎（1997）は、職場のなかでの話し言葉では、終助詞「わ」の女性専用性が低下していること、助動詞「だ」の不使用が30代以下の世代で衰退に向かっていること、「だわ」が「死語」「旧女性専用形式」化しつつあることを報告している。また、助動詞「だ」の不使用については、谷部（2000）が大学生122名を対象に、同性の親しい友人同士という条件で理由説明および状況説明場面のスクリプトを作成させたところ、平叙文の「～の」の使用は女性にのみ見られたものの、「～んだ」形式を使用する割合に男女差は見られなかった。

### 2.2. 文末のイントネーション

尾崎（1997）が女性専用性の低下を指摘した終助詞「わ」は、通常上昇調のイントネーションをとる。この「わ」を男性が使用する場合は、下降調のイントネーションをとる。マグロイン・花岡（1993）は、下降調イントネーションの「わ」は男性話者、上昇調イントネーションの「わ」は女性話者と固定的にとらえて考察し、「女らしさ」と結びつけて論じている。しかし、「わ」について言えば、女性が下降調イン

トネーションの「わ」を用いることは、若年層においては珍しいことではない。むしろどのような場合に、どのような形式が上昇調のイントネーションをとまって現れるかを重要と考える。

鈴木(1999)は、「よ」「の」「のよ」「んだ(のだ)」のイントネーションを取り上げ、テレビドラマを資料として調査を行った。分析は、轟木(1992)の5分類(「低くつく平坦な音調」「上昇調」「同じ高さにつく下降調」「強調上昇」「上昇してから下降する音調」)に基づくものである。その結果は、男女共に用いる文末表現にも、イントネーション・レベルで差異が認められことを示唆するものであった。しかしながら、音声データについては言及されていない。

また、文末詞や終助詞を対象として、発話意図とイントネーションの関わりについて考察した研究に、小山(1997)、杉藤(2001)、森山(2001)などがあるが、性差との関係を論じたものではない。

### 2.3. 本研究の位置付け

これまでことばの男女差の問題は、表現形式の違いに着目した研究が中心で、音声面を扱うにしても聴覚印象に頼った分析が多かった。しかし、話しことばの実態を総合的に明らかにするためには、正確な測定に基づく音声レベルの分析が不可欠である。そこで本研究では、若年層の用いる発話末を対象に、表現形式とプロソディの両側面から、ことばの男女差について考察する。

## 3. 調査

調査の概要は次の通りである。

### 3.1. 被調査者

調査には、都内の大学で学ぶ19歳から29歳の日本語母語話者110名(男性46、女性64)の協力を得た。また、参考データとして、日本語上級レベルを中心とする非母語話者にも協力を依頼した。

### 3.2. 調査方法

調査は、次の2つから成る。

(1) 質問紙調査

(2) 録音調査

(1) 質問紙調査

質問紙調査では、次の2つの場面について、簡単な会話を作成・記述してもらった。ともに親しい同性の友人との会話である。

1. 「理由を述べて誘いを断る」場面：【理由説明】

2. 「体の不調を指摘され、不調の箇所あるいは原因を説明する」場面：【事情説明】

録音調査においても、質問紙調査と同じ2つの場面についてデータを収集した。録音データは、(ア)「読み」と(イ)「自由発話」の2種類に分けられる。

(ア)「読み」

まず「読み」では、【理由説明】【事情説明】それぞれのモデルを示し、役割交代しながら読んでもらった。

モデルは、谷部（2000）のデータに基づき、若年層の男女が実際に作成した会話から、表現としては男女差の見られないものを選んで使用した。その際、男性が作成したもの、女性が作成したものをそれぞれ取り上げ、1場面につき2例、合計4例を被調査者に示した。疑問符・長音記号など発音に関する情報を含む表記については削除した。具体的には、次に示す通りである。

#### 【理由説明】のモデル

例1)

A: 今、時間ある？ ちょっとカフェで話そうよ。

B: ごめん。これから授業だから。

A: そっか。じゃあ、今晚、電話するね。

B: うん、わかった。本当ごめんね。じゃあ、今夜また。

#### 【事情説明】のモデル

例1)

A: なんか顔色悪いよ。疲れてんじゃない。

B: うん。今週ずっとレポートとか卒論の準備であんまり寝てないんだ。

A: もう、家(うち)帰ってねたら？

B: うん。そうしょっかな。ありがとう。じゃあね。

#### (イ)「自由発話」

(ア)「読み」に続き、被調査者には同様の条件下での自由発話を依頼した。ここでも役割交代をし、1場面につき2会話、計4会話を録音した。

質問紙調査を表現に関する意識調査とするならば、録音調査は表現および発音の実態調査にあたる。

### 3.3. 録音使用機材等

録音にあたっては、被調査者の便宜のため防音環境の整った部屋を2カ所用意した。録音場所の条件により、一方では備え付けのマイク (Sony ECM-909A) と DAT (Sony TCD-D100) を使用した。もう一方では、ICレコーダー (Olympus ボイストレック DS-20)、片耳式ヘッドセットマイクロフォン付き (Plantronics Audio 50) により録音を行った。

## 4. 分析の結果と考察

### 4.1. 発話末の表現形式

本研究では、理由あるいは事情を述べている発話をどう終わらせるかに注目し、当該発話の発話末のみを取り上げた。分析資料は、質問紙および録音資料 (自由発話の録音を文字起こししたもの) の2種類に分けられる。どちらの資料も理由/事情を説明する形式によって分類した。

#### 4.1.1. 質問紙

被調査者は110名であった。なお、理由/事情を説明する表現形式 (例:「～んだ」「～の」「～から」「～て」) を複数含む場合は、両者を採用した。したがって回答数は、【理由説明】が119回答、【事情説明】が

131 回答となっている。

図 1 は、質問紙で【理由説明】に用いられた表現形式を男女別に示したもの、図 2 は、【事情説明】に用いられた表現形式である。

グラフ中、＜無有＞と記載してあるものは、理由説明 / 事情説明の表現形式は伴わないが終助詞等を伴うもの、＜無無＞は、理由説明 / 事情説明の表現形式も終助詞・接続助詞も伴わないものを指す。終止形、体言止め、形容動詞語幹などがそれに当たる。

#### 図 1 & 図 2

図から明らかなように、どちらの場面でも、もはや「～んだ」は男性が多く使う形式であるとは言えない。その傾向は特に【理由説明】に顕著であり、実に半数以上（52%）の女性が使用しているのに対し、男性は 21% の使用にとどまっている。

一方、どちらの場面でも、男性は＜から＞＜無無＞が女性より多く、【理由説明】においては＜無無＞は＜んだ＞の使用を上回っている。

以上の結果からは「んだ」対「の」という対立関係で男女差を見るのはあまり意味がないと考えられる。但し、女性が「んだ」を多用する一方で、女性専用形式とされている「の」も使用されていた（【理由説明】で女性 14%、【事情説明】では 1%）。男性は、録音で 1 例が観察されたのみである（「今週、夜勤続いちゃってさーも、ほんとんど寝てないの」）。質問紙で用いられた「の」の例は次の通りである。

例：

ごめんね、今から図書館行くの

明日は用があって無理なの…。

今日は用事があってすぐ帰らなきゃいけないの。

#### 4.1.2. 録音

次に録音で得られた表現形式の結果を見てみよう。録音資料については、録音計数 80 件、【理由説明】86 回答、【事情説明】88 回答（複数回答有）であった。

図 3、4 に示すように、録音においても「～んだ」の使用が男女とも多かった。しかし、質問紙と比べると男性の使用が顕著に増えている。質問紙では 2 場面とも女性の方が使用が多かったが、録音では男性の方が多い。また、＜無有＞＜無無＞とも質問紙より減っており、特に【理由説明】の男性が大きく減っている。本研究での【理由説明】場面は相手の誘いを断る理由を述べる箇所である。したがって、自分の不調を説明する【事情説明】場面とは異なり、聞き手への配慮を要する。そこで録音の自由発話では、対人関係をより意識するため、いわゆる「言いきり」の形は避け、説明の表現形式を伴う発話が増えたと推測される。

#### 図 3 & 図 4

#### 4.1.3. 表現形式のまとめ

以上、質問紙・録音で用いられた「理由 / 事情を説明する形式」を見てきたが、「～んだ」が女性にも抵抗なく使われている結果となっている。むしろ「～から」や言いきりの表現が多いところに男性の表現の特徴がある。個々の項目については使用に差があるものがいくつかあるが、形式のバリエーションについては

男女差はあまりない。

## 4.2. 音声分析

### 4.2.1. 分析対象区間

本研究では、発話末に現れる【理由説明】および【事情説明】を表現する句末の2音節のみに注目して、基本周波数と持続時間を計測し、分析した。

分析対象区間のみをまとめた「読み」データはこんな感じです。

### 4.2.2. 計測方法

男女差を中和するため、音節間の基本周波数差(Hz)をセント値で表現することにし、下降が負の値をとるように計算式を変形して使用した。セントとは音楽で使用される単位で、1音の差を200等分したものである。持続時間(ミリ秒)については、2音節の比をデータとした。

基本周波数は物理量であるが、それをもとに知覚される高さをピッチという。ピッチの推定には2つのケースがある。

- (1) 上昇下降が知覚される場合
- (2) 上昇下降が知覚されない場合

(1) 上昇下降が知覚される場合とは、周波数変化が16%を越える場合で、そのときは有声区間の1/3から2/3に対応する基本周波数をピッチと見なす。(1)を除く範囲が、(2) 上昇下降が知覚されない場合で、有声区間の2/3に対応する基本周波数がピッチとなる。(Rossi 19xx, Nishinuma, 19xx)

### 4.2.3. 統計分析

統計処理にあたっては、ピッチと持続時間について、それぞれ分散分析を行った。ピッチについては、セント値を、持続時間については持続時間比、すなわち2音節間の比、を従属変数とした。要因は、ともに性別と場面である。

分散分析の結果、「男女」「場面」のそれぞれについて、音の高さと長さの使い方が極めて有意に異なることがわかった。「男女」「場面」の2要因とそれらの交互作用も有意差がみとめられた(性差:  $F(1, 148) = 19.825$ ,  $P < 0.00001$ , 場面:  $F(1, 148) = 7.864$ ,  $P < 0.0057$ 、性別・場面 ( $F(1, 148) = 3.873$ )。これは、場面によって男女の産出の仕方が異なることを意味する。

図9は、句末2音節間のピッチ差を男女別に示したものである。図から明らかなように、男性は【理由説明】【事情説明】のどちらの場面でも、1音強の下降パターンを示す。他方、女性は【理由説明】で1音弱の下降、【事情説明】で上昇か平板のピッチを用いていた。

図10は、持続時間比の分散分析の結果をまとめたものである。まず、【理由説明】については、男女とも知覚できる長音化が見られ、似たパターンが確認された。一方【事情説明】では、女性に顕著な長音化が見られ、句末2音節間の比は約1:2であった。

#### 4.2.4. 句末プロソディの要点

分析の結果から、句末プロソディの要点はつぎのようにまとめられる。

- (1) ピッチについて、男性は場面に関係なく下降パターンであるが、女性は【事情説明】では上昇か平板を用いる
- (2) 持続時間については、【事情説明】で女性が顕著な長音化を示す。

本研究の「読み」の録音では、男女とも同じモデルを読んでいるにもかかわらず、音声化にあたっては、音の高さと持続時間の変動という韻律上の特質において男女差が認められることが明らかになった。女性の句末のピッチとリズムの変動が、男性の単調な下降イントネーションと乏しい持続時間制御の発話スタイルと対比しているといえよう。

#### 4.3. 表記

質問紙の回答には、「...」を用いて口ごもったり言いよどんだりする様子を示したもの、長音記号や大小の母音表記によって長音化を示しているものが含まれていた。これは、意識面の音声特徴が反映されたもので、仮に表現形式が同じでも、産出レベルすなわち音声同様、表記レベルにおいても男女差が現れた可能性がある。

分類項目は、言いよどみ(…)、長音化(長音記号、母音表記)、表記不使用の3項目である。グラフ「質問紙：理由説明(表記)」および「質問紙：事情説明(表記)」に見るように、どちらの場面でもこうした表記を用いている被調査者は女性に多く、女性被調査者の半数程度がどちらかの表記を用いている。一方、男性の場合は、【理由説明】77%、【事情説明】86%に、表記上の特徴は見られない。

質問紙調査にあたって音声に関する指示は一切出していないにもかかわらず、女性の半数近くが音声を意識した表記を用いたことは、前節の音声特徴の男女差を反映する結果と考えられる。

図 11~14

#### 5. 結論と今後の課題

- (1) 形式のバリエーションについては、男女差は見られなかった。
- (2) 同一の表現形式を使用していても、音声的特徴すなわち音の高さと持続時間には、極めて有意な男女差が見られた。特に、女性は場面によって音声的特徴を使い分けるが、男性は常に同一の形式をとっていた。このような音声的な特徴は、いわゆる「言いよどみ」や長音化を表す表記にも反映されていた。

大曾(2005)は、女性の雑談データを資料とした調査において、「よね」が「熟年」世代に比べ「若者(19歳から30歳まで)」に多用されていることを指摘し、この結果は、若者が自己主張しながらも、聞き手に配慮しながらそれを行っていることを示すとしている。

本調査において明らかになった若年層女性の音声的な特徴も、聞き手への配慮意識を反映するものと考え

られる。男女ともに自然に使われている表現形式も、実際に音声化してみると、女性話者はピッチや持続時間を調整することによって、男性話者よりも相手への働きかけを意識した言語行動をとっている。

今回の調査では、同性の親しい友人同士という設定で行ったが、今後はサンプル数を増やすとともに、異なる相手や場面を設定した場合にどのような変化が現れるか観察の幅を広げる予定である。また、教育的応用のために非母語話者との比較も行いたい。

#### [ 参考文献 ]

- 大曾美恵子 (2005) 「終助詞『よ』『ね』『よね』再考 - 雑談コーパスに基づく考察 -」 鎌田修、筒井通雄、畑佐由紀子、ナズキアン富美子、岡まゆみ編『言語教育の新展開 - 牧野成一教授古稀記念論集 -』ひつじ書房 pp.3-15
- 尾崎喜光 (1997) 「女性専用形式のいま」現代日本語研究会編『女性のことば - 職場編 -』ひつじ書房
- 現代日本語研究会編 (1997) 『女性のことば・職場編・』ひつじ書房
- 現代日本語研究会編 (2001) 『男性のことば・職場編・』ひつじ書房
- 小林美恵子 (1993) 「世代と女性語 - 若い世代のことばの『中性化』について -」『日本語学』第 12 巻 5 号 pp.181-192
- 小山哲春 (1997) 「文末詞と文末イントネーション」 音声文法研究会編『文法と音声』くろしお出版 pp.97-119
- 杉藤美代子 (2001) 「終助詞『ね』の意味・機能とイントネーション」 音声文法研究会編『文法と音声』III くろしお出版 pp.3-16
- 鈴木千寿 (1999) 「文末表現のイントネーションと男女差」現代日本語研究会編『ことば』第 20 号
- 轟木靖子 (1992) 「東京語の文末詞の音調と機能についての考察 - 『よ』を中心に -」『日本語・日本文化研究』第 2 号 大阪外国語大学日本語学科
- マグローイン・花岡直美 (1993) 「終助詞」『日本語学』第 12 巻第 6 号 (特集 世界の女性語 日本の女性語) pp.120-124
- 森山卓郎 (2001) 「終助詞『ね』のイントネーション - 修正イントネーション制約の試み -」 音声文法研究会編『文法と音声』III くろしお出版 pp.31-54
- 谷部弘子 (2000) 「話し言葉における男女差としてみた『んだ』」『日本と中国ことばの梯 - 佐治圭三教授古稀記念論文集 -』くろしお出版 pp.187-196

Nishinuma, Y. (1977): « Paramètre de durée et de fréquence dans la perception de l'accent en japonais », *Travaux de l'Institut de Phonétique d'Aix*, 4, 45-81.

Rossi, M.(1977) : « Le seuil de glissando ou seuil de perception des variations tonales pour les sons de la parole », *Phonetica*, 23, 1-33.

Rossi, M., Di Cristo, A., Hirst, D., Martin P. & Y. Nishinuma (1981) : *L'intonation : de l'acoustique à la sémantique*. Paris : Klincksieck.